

W. フリットナーの「素人教養 (Laienbildung)」論に関する一考察

小川 哲哉

1. 問題の所在

ヴィルヘルム・フリットナー (Wilhelm Flitner : 1889-1990年) が, E. シュプランガー, T. リットと共に精神科学的教育学派を形成し, 現代ドイツ教育学の理論形成に大きな影響力を与えてきたことはよく知られている。すでに指摘されているように, フリットナーの教育学研究は, 教育学の「科学的性格」と「自律性」をめぐる論究から, 「ギムナジウム改革」, 「教員養成」等の考察にいたるまで多岐にわたっているが, これらの研究の出発点になったのは, 「教養論」を柱とする初期の「民衆教育思想」研究である⁽¹⁾。

フリットナーの民衆教育思想は, 第一次大戦前の「ドイツ青年運動」体験と, 大戦後からヴァイマル期の「民衆大学運動」を通して形成されたといつてよいが, その中核に位置づけられるのが, 「素人教養」論である。彼は1921年初の教育学的著作『素人教養』を出版するが⁽²⁾, この著作は当時極めて大きな反響を呼び, 広範囲な民衆教育論争を巻き起こした。

本論文の目的はこの「素人教養」論を巡る論争の一端を明らかにし, 彼が探究した「教養論」の特質を分析することである。その際特に注目したいのは, フリットナーと対極に位置していたG. ヘルメス⁽³⁾の所論である。彼女はフリットナーの著作を批評し, フリットナーはそれに対して反批判を試みている。ここでは彼らの論争を比較検討して両者の立場を鮮明にしてみたい。まず最初は「素人教養」論の概略をおさえることから始めよう。

2. フリットナーの「素人教養」論

著作『素人教養』において, フリットナーはドイツ青年運動の「共同体」体験に基づき, 新しい成人教育の指針となる民衆教育思想を展開した。近年この著作は, 「美的教養」による新しい社会運動を切り開いたものとして再評価されているが⁽⁴⁾, 当時は民衆教育活動における「教養」のあり方を巡って大きな論争を巻き起こした著作であつ

た。フリットナーはこの著作の中で、「ドイツ的教養」問題を民衆教育問題として捉え、独自の概念である「素人教養 (Laienbildung)」概念を提示した⁽⁵⁾。

フリットナーが、この「素人教養」概念の基底においたのは、日々の仕事への献身的取り組みや、日常的な事柄の中にある「精神的包括物」であり、「素人の精神性 (Die Geistigkeit der Laien)」と呼ばれるものであった⁽⁶⁾。それは学問的鍛錬によって獲得される知識人の教養とは違い、民衆の日常生活や文化において培われた思索や活動で獲得されるものであった。フリットナーによれば、そのような民衆の「精神性」に基づく「素人教養」こそが、変質した「新人文主義的教養」にとらわれていた「教養人」には求められており、そのために民衆と教養人が共に活動できる「場」が必要であるという。

フリットナーがそのような「場」として注目したのは「芸術」創造空間であった。しかも彼が想定した「芸術」は、芸術家の「純粹芸術」ではなく、生活の中から作り出され、使われる、いわゆる「応用芸術」であった⁽⁷⁾。そしてそのような芸術活動を展開していた当時の「ドイツ青年運動」にフリットナーは注目した。中でも彼は青年運動の音楽活動、とりわけ「合唱」活動に注目したのである。青年運動では古き「民衆歌謡」文化が探究され、「共同体」が自然に形成される活動が展開されていたが⁽⁸⁾、そのような共同体において民衆と教養人が共に活動できる「ミューズの教育」の重要性をフリットナーは指摘した⁽⁹⁾。

ただ彼は、単に応用芸術による「美的教養」のあり方を論究しただけではない。彼の論究のもう一つの柱は、現代社会における「科学」的影響力の問題であった。W. シャイベの指摘にもあるように、彼の科学論はニーチェ以来の「文化批判」の系譜に連なるものであった⁽¹⁰⁾。フリットナーによれば、今日科学的志向性の拡大は、人間の内面的豊かさを喪失させ、それによって文化的危機状況を生起させている。だがこのような状況の解決は科学を否定することで可能となるわけではない。科学の社会的影響力はもはや排除できないし、そうすることは非現実的な選択である。そうではなくて問題なのは「科学的エートス」が、教養人に徹底的に結びつけられ⁽¹¹⁾、民衆と疎遠な立場で彼らの特権的優位を保証していることである。

このような状況から脱却するため、教養人が「素人の精神性」を理解して民衆と一体化することが必要であるとフリットナーは主張する⁽¹²⁾。

3. 「素人教養」論を巡る論争

上述したようなフリットナーの「素人教養」論は、当時大きな反響を呼び、賛否両

論が噴出し、広範囲な民衆教育論争を巻き起こした。それは単なる書評から本格的な批判論文に至るまで10編にのぼるが⁽¹³⁾、その中でもG.ヘルメスによるフリットナー批判は⁽¹⁴⁾、それに対してフリットナー自身が反批判を展開した唯一の事例として重要である。ここでは両者の論争を立体的に捉えるため、まずヘルメスのフリットナー批判⁽¹⁵⁾を提示し、それに呼応する形でフリットナーの反論⁽¹⁶⁾を対置してみたい。

(1) 「上部ドイツ」的傾向性と「低地ドイツ」的傾向性に対するヘルメスの見解

ヘルメスはまず最初に、フリットナーの教養論の基底にある「上部ドイツ (oberdeutsch)」的性格を問題にする。一般的に言えば「上部ドイツ」は、ドイツ南部と南西地方を指し、独自の方言を話す地域と見なされるが⁽¹⁷⁾、ヘルメスは単なる地理的、言語的特質を問題にしたのではなかった。それは「地理的」ではなく、「民族的」相違であり、「その境界は北ハルツと南ハルツの間にある分水嶺から東西に走る区分線で形成されており」⁽¹⁸⁾、地域や風土に根ざした人間の思想と行動の相違を示すものであった。

「上部ドイツ」的なものに見られるのは、精神的調和を生み出す創造活動であり、それは「芸術」活動によって高揚させられる「ゲーテ的精神」である。フリットナーは、そのような精神の高揚を素朴な民衆、すなわち「素人」に求めている。だがそうした要求は、産業化が進行して民衆生活が崩壊寸前の現状では、もはや受け入れられないとヘルメスは批判する。

これに対して「低地ドイツ (niederdeutsch)」的精神は、常に「全体の中で生きているし、全体と共に生きている」⁽¹⁹⁾と彼女は指摘する。「低地ドイツ」的精神の特質は、ビスマルクの政治的指導性によりプロイセン国家に統一がもたらされたような「国家的課題」全体と関わろうとする傾向性である。そのような「低地ドイツ」地域では日常生活の中に、フリットナーの「素人教養」世界のような芸術的「天空」が形成されることは考えられないとヘルメスは主張する。なぜならそのような日常世界は、一時の「気晴らし」でしかないからである。低地ドイツ人のエートスは、「政治的情熱」であり、彼らに相応しい教養活動とは、政治的円卓会議や実践活動を習得することである⁽²⁰⁾。

ヘルメスにいわせれば、このような「低地ドイツ」的傾向性が、「上部ドイツ」地域では不当に低く評価されているという。その理由は、「北東ドイツが芸術的に貧しい」という上部ドイツ人の誤ったイメージに起因していると彼女は指摘する⁽²¹⁾。

(2) 「上部ドイツ的なもの・低地ドイツ的なもの」に対するフリットナーの反論

フリットナーは、民衆教育活動の特色を「上部ドイツ」、「低地ドイツ」と区別する

ヘルメスの見方そのものに反論した。というのも民衆教育活動の特色は、ドイツの「工業地域」と「農業地域」の違いによって区別されるべきであると彼は考えていたからだ⁽²²⁾。特に多くの工業地域では、機械的労働活動による「精神的空虚さ」が広がっており、その空虚さを埋めることが農業地域よりも強く渴望されている。その証拠は、各地の工業都市に数多くの民衆大学が創設されていることから理解できる。

またフリットナーによれば、政治、経済問題への関心はどの地域でも高いのであり、「上部ドイツ」(=芸術的世界形成)、「低地ドイツ」(=政治的世界形成)という単純な二項区分は現実的ではないという。しかも日常生活で芸術的世界を形成する多様な「民衆力(Volkskräfte)」は、都市部にも未だに残存しており、その力を再生することは可能であるとフリットナーは指摘する⁽²³⁾。そのような民衆力に「上部ドイツ」や「低地ドイツ」の区別はなく、だからこそ、そのような力を再生させるために「共同体」を形成させることが必要であるという。

さらに彼は、ヘルメスが論拠にしている「上部ドイツ」と「低地ドイツ」の民族的特徴の正当性を問題にする。フリットナーによれば「低地ドイツ」の代表的地域「ニーダーザクセン地方」は音楽的に豊かな場所であり続けてきたし⁽²⁴⁾、むしろ低地ドイツ語で書かれた文芸の方が豊かな音楽性を有しているという。というのも「ドイツ青年運動」が発展の足がかりを得たのはニーダーザクセン地方だし、新しい「芸術教育運動」(A.リヒトヴァルク)は目下ハンブルクで進められているからだ。この事実から見ても政治的・国家的志向性と芸術的志向性は矛盾しないで併存できるとフリットナーは主張する。

(3) ヘルメスの「ドイツ青年運動」批判

ヘルメスは、フリットナーの「素人教養」論が「上部ドイツ」的なものに彩られている理由を「ドイツ青年運動」との連関性において理解している。このような理解は妥当ものであるといえる⁽²⁵⁾。

だがヘルメスは、このような「ドイツ青年運動」の存在それ自体を問題にした。彼女にいわせれば青年運動は典型的な「ブルジョア内部の運動」であり、ひたすらゲーテ時代のロマン主義に回帰しようとする運動であり、そこにはブルジョア的退廃が見られるし、若者たちも自己完結的活動に満足してしまっている⁽²⁶⁾。ヘルメスによれば、今や労働者はそのような過去のロマン主義よりも、「大衆世界、大都市世界、煙突とうなりを上げる機械の世界、過酷な現実世界」と対峙して自己形成を果たすことを希望しているという⁽²⁷⁾。

このような状況が進行しつつある今日、フリットナーがいうように教養人と一般大

衆が共に集う芸術活動は「幻想」であり⁽²⁸⁾、むしろ教養人の方が大衆の中に入り込んで多様な活動を行う必要があるとヘルメスは指摘する⁽²⁹⁾。

(4) 「青年運動」と「民衆大学運動」に対するフリットナーの見解

上述したような彼女の「ドイツ青年運動」批判に対するフリットナーの反論は、形式的であり、正面から対抗するものではなかった。というのも彼は、ヘルメスのように青年運動を政治運動と見なそうとはしなかったからである⁽³⁰⁾。

そこには彼自身の青年運動観が大きく作用していたと考えられよう。すなわちフリットナーにおける青年運動のイメージは、あくまでも大戦前の「自由ドイツ青年運動」や「ゼラ・クライス」のような非政治的運動にあった⁽³¹⁾。フリットナーには、そのような運動の成果が戦争のために実現しなかったという思いが強い。このため彼は、青年運動を体験した成人世代による「民衆大学運動」に期待をかけたのである。

ただフリットナーは、民衆大学運動に対して青年運動のような非政治性を要求したわけではない。彼も政治的活動の重要性は認めていた。しかしながら、その運動に傾注し過ぎるあまり、「生活再生 (Lebenserneuerung)」を目標とする精神活動が疲弊してしまうことを問題にしたのである。ヘルメス的な青年運動観には、「教育や伝統からは何も受け継ごうとはせず、ただ社会革命を求める」⁽³²⁾政治性が感じられ、そのためフリットナーは、彼女の青年運動批判と正面から論争することに意味を見いださなかったのである。

むしろ敗戦による精神的荒廃が広がっていた当時、フリットナーが民衆大学運動に求めたのは、体制変革の政治活動ではなく、「生活再生」的な精神活動であった。さらに彼は、その活動のために近年二つの諸力、すなわち「労働者階級の連帯と公共経済主義」に基づく「社会主義」力と、成熟した「古き精神生活の蓄積」に基づく「伝統」的教養の「道徳力 (sittliche Kräfte)」が拡大していることに注目し、それらの諸力が「教育共同体」の中で融合することが必要であると主張した⁽³³⁾。

フリットナーによれば『素人教養』においては、まさにそのような「伝統」的教養が「新しい民衆」にいかなる形でもたらされ、そのような教養が「教育共同体」の中で、どのようにして「精神的財産」へと変わるのかが論究されているのだという⁽³⁴⁾。そして、こうした問題の解決は、「政治的課題」として取り扱われるのではなく、純粋に「教育的課題」として扱われるべきであり、そのような観点がヘルメスには決定的に欠けているとフリットナーは結論づけるのである。

4. 結語的考察

すでに指摘したようにフリットナーの『素人教養』に対する書評や批判論文は10編にのぼるが、フリットナー自身がそれに対して問髪をおかずに返答を試みたのは、ヘルメスの論文だけである。

フリットナーが、ヘルメスの批判に即座に反応したのは、彼女が当時テューリングゲンを中心に展開されていた民衆大学運動におけるもう一つの大きな勢力に属しており、「教育と労働」の結合を目指し、政治的活動との連携を視野に入れていたからである⁽³⁵⁾。民衆大学運動にそのような方向性を求めないフリットナーにとって、ヘルメスの批判は一考に値するものであった。

「上部ドイツ」・「低地ドイツ」的傾向性に関する両者の論争で、ヘルメスが民族的視点からフリットナーの「上部ドイツ」的傾向性を批判したことは、厳密に言えば学問的論拠が不十分であり、フリットナーの反論は正鵠を得ているように思われる。ただ今日的視点からこの論争の歴史的意味を考えれば、重要なのは学問的正当性の問題よりも、むしろヘルメスがフリットナーの「美的教養」活動を、地域特殊的なものと見なし、広範囲に妥当する活動とは考えていなかった点である。すなわち社会民主主義系の論者には、彼の「美的教養」論は、そのようなスタンスでしか評価されなかったのである。そのため「ミューズの教育」や「ドイツ民衆文化」問題が本格的な議論の俎上に登ってこないのである。

しかもそのような評価ゆえに、議論の中心はフリットナーの「素人教養」論が依拠する「ドイツ青年運動」の「ブルジョア的性格」問題におかれることになる。ヘルメスは、フリットナーが労働者の現実世界を見ないでロマン主義的幻想世界へと逃避していることを強く批判しているが、そのような批判的構図ゆえにフリットナーの「素人教養」論のもう一つの柱である科学論の問題は取り上げられず、結果的には「民衆教養」問題は巧みに「階級闘争」問題へとすり替えられていったように思われる。

フリットナーが、「階級闘争」問題へのすり替えを批判したのは、それによって「生活再生」のための諸活動が疲弊してしまうことを危惧したからである。フリットナーにおいては精神的充実がなされてこそ社会改革が実現すると考えられており、そのためにも政治的中立性を保ち、自由主義的なスタンスによって民衆教育活動を展開する必要性があったのである。さらにフリットナーは、「古き精神生活の蓄積」による「伝統」的教養が、新しい民衆共同体の生き生きとした精神活動によって刷新される意義を強調している。ところが、このような「伝統」的教養に対するヘルメスのコメントはほとんど見られない。ヘルメスのこのような姿勢はフリットナーに比べると、「ハビ

トウス」のように染み込んだ「伝統」文化の影響力を過小評価しているように思われる。

ただ政治的「中立性」を保持するフリットナーの主張にも問題がある。確かに「中立性」を保ち、民衆教育活動を教育的な「理論＝実践」問題に限定するフリットナーの姿勢は、充実した精神活動にとって不可欠なものであろう。しかしながら、それが強調されればされるほど政治問題への鋭敏な洞察力が弱められる危険性がある。そのような傾向性は、ヘルメスと比較すれば明らかであるし、それはナチズムの危険性に対して、彼が両義的姿勢を示した遠因にもなったように思われる。

以上見てきたように「素人教養」論めぐるヘルメスとフリットナーの論争は、基本的には本質的一致点を見いだすには至らなかった。むしろ論争によって両者の違いはより際立てられたといえるかもしれない。だがすでに指摘したようにヘルメスの社会改革への関心が、「素人教養」論の争点の一つである「伝統」的教養問題に向けられなかったことから、ドイツ文化やドイツ的慣習と深く関わっている「政治的課題」や「教育的課題」、さらにそれらの課題が複雑に絡み合って展開される民衆教育活動の力動的関係を分析することが、両者において不十分なままになっている。そのような問題への取り組みをヘルメスとフリットナーは、その後具体的な民衆教育実践において、それぞれ違う形で行っているが⁽³⁶⁾、こうした点に関する考察は今後の課題としたい。

註

- (1) H. レールス, H. ショイアール編/訳者代表天野正治『現代ドイツ教育学の諸潮流 W. フリットナー百歳記念論文集』玉川大学出版部, 1992年, 5-10頁。
- (2) Flitner, W. : Laienbildung, Jena 1921.
- (3) G. ヘルメス (1872-1942年) は、長年高等女学校の教師を務めながらベルリンの労働組合運動に深く関わっている。1919年から1922年まで彼女は、テューリンゲン民衆大学の「巡回教師 (Wanderlehrerin)」として各地を訪問した。1922年にライプツィヒに移住し、H. ヘラーと共に民衆教育運動における「ライプツィヒ派」を形成して、「ライプツィヒ民衆大学」創設し、その活動を指導した。「素人教養」論を巡る論争は、ヘルメス50才、フリットナー33才の時になされた。ヘルメスの略伝は以下の文献が詳しい。Friedenthal-Haase, M./Meilhammer, E. (Hrsg.) : Blätter der Volkshochschule Thüringen 1919-1933. Bd.1. (März 1919 bis März 1925), S.44. また、ヘラーの民衆教育活動に関する論文としては、山口利男「ヘルマン・ヘラーの政治教育論—「社会主義と国民」統合の試みに関連づけて—」横越英一編『政治学と現代社会』御茶の水書房, 1983年所収がある。
- (4) 今井康雄「ワイマール期ドイツにおけるアカデミズム教育学と芸術教育—美は教育にいかなる困難と可能性を導き入れたか—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻, 2002年。Thiel, F. : "Neue" soziale Bewegungen und pädagogischer Enthusiasmus. Pädagogische Impulse der Jugend- und Lebensreformbewegung am Anfang des 20. Jahrhunderts. In : Zeitschrift für Pädagogik, Jg.45, 1999, Nr.

- 6.
- (5) Scheibe, W. : Die reformpädagogische Bewegung, Unveränderter Nachdruck der 10., erw. Aufl. Weinheim und Basel 1999 (1969, 1994), S.360-362. “Laie” は、語源的には“laos (=Volk)”に由来し、「一般庶民」を意味するが、フリットナーが専門化された「教養人」との対比を強調している点を考慮すれば、「素人」と訳すことが望ましいように思われる。
- (6) Flitner, W. 1921, a. a. O., S.2-3.
- (7) ibid., S.8.
- (8) ibid., S.11.
- (9) ibid., S.7ff. フリットナーの「ミューズ的教育」論を取り上げた論文には以下のものがある。長谷川哲哉「W・フリットナーのミューズ教育論」『和歌山大学教育学部教育実践指導センター紀要』No. 7 1997年。ただし長谷川は、フリットナーの主著である『素人教養』において展開されている「ミューズ的教育」論については触れていない。
- (10) Scheibe, W. 1999, S.359-360.
- (11) Flitner, W. 1921, a. a. O., S.33.
- (12) ibid., S.50. このような彼の「素人教養」論は、単に教養人が、自己の存在を民衆の日常生活へと組み込むことにとどまるものではない。むしろそれは、価値観の多様化の中で統一的な「民衆」像の形成が切実な問題とされていたヴァイマル民主主義にとって不可欠な課題であったといえるだろう。
- (13) フリットナーの「素人教養論」論に関する書評や批判論文は以下の通りである。
- ① Griesebach, E. : Volksbildung. In : Probleme der wirklichen Bildung. München 1923.
 - ② Hermes, G./ : Laienbildung. In : Blätter der Volkshochschule Thüringen, 3. Jg., Nr.19, 1. Januar 1922, S.143-146.
 - ③ Herrigel, H. : Priesterbildung und Laienbildung. In : Die Arbeitsgemeinschaft, 4. Jg., 1923, S.10-19.
 - ④ Hofmann, W. : Laienbildung. In : Volksbildungsarchiv, 8 Bd., 1921, S.350-360.
 - ⑤ Holek, W. : Laienbildung. In : Akademisch-soziale Monatsschrift, 6. Jg., H.1, 1922, S.8-15.
 - ⑥ Koch, G. : Besprechung der Laienbildung. In : Die Dorfkirche, 15. Jg., 1922. S.191.
 - ⑦ Kriek, E. : Besprechung der Laienbildung. In : Badische Schulzeitung, 53. Jg., Nr.23, 4. Jnui 1921, S.343.
 - ⑧ Neurath, O. : Sozialistische Bildungsprobleme. In : Die Gloche. Wochenschrift für Politik, Finanz, Wirtschaft und Kultur, 7. Jg., 29. H., 10 Oktober 1921, S.777-782.
 - ⑨ Rosenstock, E. : Laienbildung oder Volksbildung ? In : Volksbildungsarchiv, Bd.8. Berlin 1921, S. 381-388.
 - ⑩ Thier, E. : Weitere Aussprache über Volkshochschule und Arbeiterschaft. In : Blätter der Volkshochschule Thüringen, 3. Jg., Nr.24, 15. März 1922, S.182-183.
- (14) 正確に言えば前半部分は、R. ブーフヴァルトによる『素人教養』の概略がまとめられており、それを受けてヘルメスの批判論文が展開されている。
- (15) Hermes, G. : Laienbildung. In : Blätter der Volkshochschule Thüringen, 3. Jg., Nr.19, 1. Januar 1922, S.143-146. この書評は、1頁二段組みで書かれているため、以下頁の左部分を「a」右部分を「b」で標記する。
- (16) Flitner, W. : Zu G. Hermes' Bemerkungen. In : Blätter der Volkshochschule Thüringen, 3. Jg., Nr. 20, 15. Januar 1922, S.151-152. ヘルメスの批判論文同様に、以下頁の左部分を「a」右部分を「b」で標

記する。

- (17) 田中泰三『ドイツ方言』郁文堂出版, 1956年, 1-5頁。
- (18) Hermes, G. 1922, S.144b.
- (19) *ibid.*, S.145a.
- (20) *ibid.*, S.145a.
- (21) *ibid.*, S.145a.
- (22) Flitner, W. 1922, a. a. O., S.152a.
- (23) *ibid.*, S.152a.
- (24) *ibid.*, S.152a.
- (25) Flitner, W. 1921, a. a. O., S.14. 「我々は新しい素人芸術の端緒を音楽の中で…青年運動の中で体験した…ロマン主義の片隅でいまだに光を放つ民衆歌謡の古き小さな炎が, 青年運動における共同体のたいまつとなった」とフリットナーが象徴的に述べているように, 彼にとって青年運動は「素人教養」論を語る上で極めて重要なものであった。
- (26) Hermes, G. 1922, a. a. O., S.145b. ヘルメスによれば「ドイツ青年運動」には「過去的美徳を食べている階級の極めて陰鬱な衰弱」が見られ, 若者たちはそのような精神世界の中で「自己完結」する共同体活動に満足してしまっているという。
- (27) *ibid.*, S.146a.
- (28) *ibid.*, S.146a.
- (29) *ibid.*, S.146a. もちろんヘルメスもフリットナー同様, 教養人の任務は革命による破壊から価値ある伝統を救済することにあると述べているが, そのためには「教養人が自己の指導幻想を捨て去り」, 大衆に入り込む必要があると主張する。
- (30) Flitner, W. 1922, a. a. O., S.152b. 彼は, 「ブルジョア青年運動の強い影響下で生じたプロレタリア青年たち」の諸活動が, 「…激情にかられて青年運動と一線を画する」ことを危惧し, プロレタリア青年たちが青年運動の歴史的意義を見失うことがないように呼びかけている。これはプロレタリア青年たちの諸活動が, フリットナーには本来の青年運動とはかけ離れたものであり, それが政治活動へと変質することを問題にした。
- (31) フリットナーの「自由ドイツ青年運動」や「ゼラ・クライス」における活動は以下の拙論参照。小川哲哉「ドイツにおける青年運動の展開—ゼラ・クライスの活動を中心に—」小笠原道雄監修/林忠幸・森川直編『近代教育思想の展開』福村出版, 2000年。
- (32) Flitner, W. 1922, a. a. O., S.152a.
- (33) *ibid.*, S.151b.
- (34) *ibid.*, S.152a.
- (35) 彼女は「プロレタリア青年」のための自助的施設の役割を有する「民衆大学舎」の創設を進めながら, 労働と自己教育を融合させた独自の民衆教育活動を目指していた (山口利男 1983年, 前掲論文, 631頁)。
- (36) ヘルメスはその後, ライプツィヒ民衆大学において, H. ヘラーと共に労働者の現実生活に即した民衆教育活動を展開するし, フリットナーはイエーナ民衆大学において「生活近接」的な実践教育を展開し, 個々の労働者の自律的教育活動を進めている。両者の活動に関しては以下の論文参照。山口利男 1983年, 前掲論文。小川哲哉「ヴィルヘルム・フリットナーと民衆教育運動—イエーナ民衆大学における活動を中心に—」『広島大学教育学部紀要』第1部第36号, 1987年。